

第 6 2 回学習会を，平成 2 7 年 1 0 月 3 0 日（金）19：00～20：00 福翔高校にて行いましたので，報告いたします。

第 6 2 回の内容

講師 重枝一郎先生

振り返り活動を通して，行動の質を高める

- 1 何か活動をしたら，振り返り活動を行いたい
- 2 インナールールを高める，アウトルールを効果的に指導
- 3 「自己有用感」を高める
- 4 「自尊感情」それとも「自己有用感」
- 5 振り返り用紙には「みんな」は禁止
- 6 リレーションとルールは同時に育てる
- 7 その他「ウサギとカメ」
- 8 演習「まちがいさがし」「リレートーク」



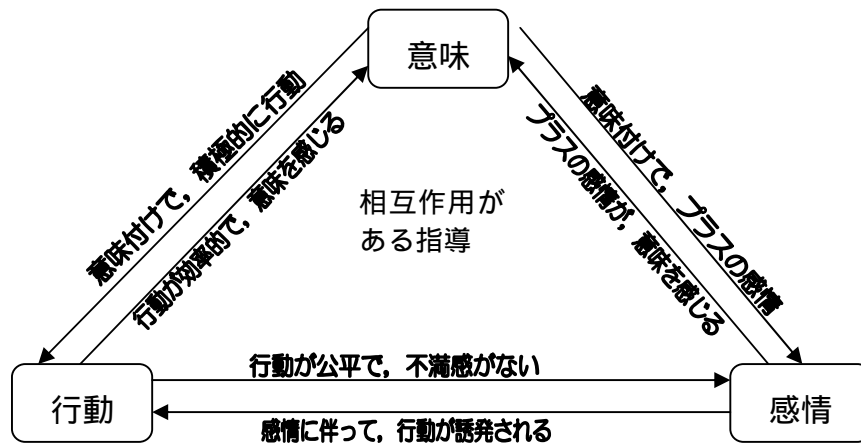
振り返り活動を通して，行動の質を高める

1 何か活動をしたら，振り返り活動を行いたい

- ・ 学級活動，係活動，行事，部活動等の後，しかしながら教科の時間に振り返りを組み込むことが大きな効果を生む。（一日の大半は教科の授業）
- ・ この時間は，インナールールを高める時間にもなる。（認めるコメント，態度，表情）
- ・ 「自己有用感」を高めることがねらい。（生徒同士の「ほめレター」）
- ・ 「意味」と「行動」と「感情」に働きかける。（下表参照）

（○手立て， 効果）

	ルール	リレーション
意味	○目標の明確化やスモールステップ化を行うとともに，ルールの意味を絶えず子どもに話している。 - つまり，行動への目標化だけでなく，行動したことの意味付けも行われる。また，スモールステップで達成感を味わうことができ，プラスの感情をもちやすい。	○チームワークの必要性を常に語りかけている。 - 関係性→思考→行動→結果 のサイクルを意味付けることで，積極的に行動し，プラスの感情をもちやすい。
行動	○日常の細かな活動（給食準備，整列・・・）を一定の型で示している。 - 効率的であることで，意味も強化されやすい。公平的であることで，プラスの感情をもちやすい。	○小グループで，互いに関わる機会を多くする。また，役割も明確になるように活動させている。 - 認め合う，伝え合う振り返り活動を行うことで，集団の一員である意味や感情をもちやすい。
感情	○逸脱行為，トラブルの場合にも，単に叱責するのではなく，相手の気持ちになることを促し，子どもの感情や罪悪感に訴えかけている。 - 感情に伴って問題行動が誘発されていることが多いので，まずは行動の意味を考えさせ，その上で感情を変容させ，結果として行動を変容させる。	○行事の後の振り返りだけではなく，日々の活動の振り返りをしている。活動の是非だけでなく，その時の感情交流も行っている。 - プラスの感情交流が具体的な行動に対する肯定感をもたらしたり，行動を強化したりする。



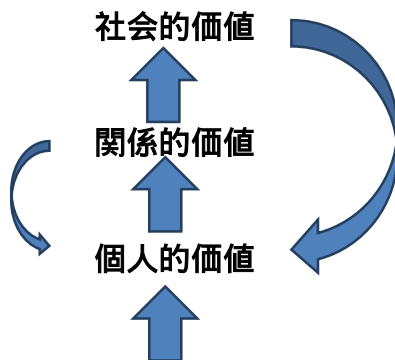
2 インナールールを高めるアウタールールを効果的に指導

- ・ 「Q-Uの一般的な対応とは逆の場合もある。(千代中での指導)」
- ・ ルールを押し付けていることを意識しつつも、不快感のないものとして生徒は受容し、自然な形で受け継がれる。

3 「自己有用感」を高める

「自己価値感」をもたせる「社会的励ましと説明」

→ 自分の存在を自らが意味あるもの、価値あるものとして認めること
価値はつながりの中から生まれる。



基底的価値：この世に生まれてきた人はみんな大切という、

その他の価値の根底にある価値観

「自分が楽しい」ということだけでなく、「友だちが喜ぶ」「先生がほめてくれる」ということを見出した子どもは、「みんなが楽しい」ということを通して「自分も楽しい」という「自己価値感」をもつことができる。

例えば、サッカーチームが地域・学校から応援されると、広くまわりから受け入れられている感覚(社会的価値)を満たし、チームメイトやコーチとの関係が良好であれば(関係的価値)、達成したい目標を見出し、やる気(個人的価値)も向上する。つまり、自分が役立っているという「自己価値感」が深まっていけば、「個人的価値」も向上するという相互作用が生まれる。

このように、関係性や社会性に基づいた「社会的励ましと説明」は、「自己価値感」をもたせることができる。(Teacher's Teacher 2 より)

「自己価値感」は「自己有用感」と捉える。

4 「自尊感情」？それとも「自己有用感」？

- ・ 「自尊感情」：自己に対して肯定的な評価を抱いている状態 Self - esteem
- ・ 「規範意識」の重要性をあわせて考えるなら、「自己有用感」
- ・ 「自己有用感」：他者との関係を自他共に肯定的に受け入れることで生まれる，自己に対する肯定的な評価，他者の存在なしには生まれない。
- ・ 自尊感情 = 自分
自己有用感 = 自分 + 他者（集団や社会）
つまり，「自己有用感」の獲得が，「自尊感情」の獲得につながる。だから，「自己有用感」にこだわる。
- ・ 振り返りシートの教師のコメントは，ただ「がんばったね」とほめるだけでは「自尊感情」は高まっても，「自己有用感」は高まらない。その生徒が「こだわった」「見てほしかった」点に触れた記述をすることが大切。それが，「自己有用感」を高めることにつながる。

「生徒指導リーフ18」を読んでみよう。振り返りでの視点が決まる。

5 振り返り用紙に「みんな」は禁止

- ・ 教師の基準や水準で「ほめている」ことが多い。そしてそれを評価している。
- ・ 生徒は「認められたい」=「ほめられたい」，そのためには生徒が自分なりにどこをこだわっていたり，工夫したりしたのかを知る。具体的な場面や目標等。
- ・ 自分がさほど努力もしていないことを「みんながんばったね」とまとめて言われてもうれしくない。チャホヤは自尊感情すら高めない。
- ・ 目標づくりが重要。（前回の「自ら学ぶ意欲」の話につながる）
- ・ 振り返りシートと一緒に活動した友達の名前をはっきり書かせる。（「みんな」は禁止）そして，具体的な場面が少しでもあれば，その人の名前を書いてよいとする。その具体的な場면을添えてその人のことを発表させる。

6 リレーションとルールは同時に育てる

- ・ 振り返り活動では，自己有用感を高めていく。（自尊感情は含まれる）
- ・ 「○○君の・・・の行動で，とてもうれしい思いをした」この振り返りが生徒から出た時
→「だったら，その行動は他のみんなはどう感じるだろう」「だったら，この行動を私たちのクラスの行動ルールとしたら」
- ・ 感情を振り返りながら行動のルールを作れる。その後，その経験を積ませ，意味につなげる。
- ・ リレーションとルールは同時に育てる。ソーシャルスキルTRとエンカウンターは別々ではなく，統合した形で指導するはず。

その他

「ウサギとカメ」

皆さんは，「ウサギとカメ」の童話を知っているでしょう/あらすじは・・・/

カメがウサギに勝つという信じられない話ですが，なぜ，カメが勝ち目のない競争をしたのか，不思議に思っていました/ある人に教わってわかりました/

カメは「ウサギはウサギ，自分は自分。ウサギとの競争は考えないで，マイペースでとにかく山のふもとのゴールを目指そう」と考えたのだそうです/カメの目標は山のふもとのゴール，目的は自分との戦いに勝つことでした/カメは，目標を定めて，全力で必ずやり遂げることを繰り返すことで，夢を実現しようとしたのです/

皆さんも目標をしっかり立てて挑戦していますか？例えば1年間遅刻をしない，学校や部活動を休まない，チャイム席を守るなど，何でもいいでしょう。目標を立ててやり遂げてください/

目標や目的を自覚することは大切であるという命題は正しいでしょうか/

私自身を振り返ると、サッカー部を勝たせたい、クラス通信をたくさん出そうなど、その時々で目標はありました/しかし目的を自覚していなかったように思います/明確な目標や目的があって努力していたというより、毎日がおもしろかったからだと思います/

人には、遠くを見て大きな目標や目的を掲げて挑戦する「鳥型人間」と、近くを見て小さな目標を見つけては一段ずつ登っていく「アリ型人間」とがいます/私は「アリ型人間」でやってきたように思います/上の階段を探すときに、目標や目的で階段を選ぶよりも、楽しく実感を伴う毎日の方を選びました/その方がワクワクするような予感がしていました/ですから、必ずしも明確な目標や目的をもっている必要はないと考えています/

この先生の考え方も疑ってください/正解を教えてもらおうという「癖」は捨てましょう/正解があるかどうか分からないのですから、それぞれが考えるしかありません/

注意してほしいことがあります/目標や目的を自覚することが大切であると考えるか、あるいは必ずしも明確な目標や目的をもっている必要はないと考えるか、という二者択一から選んで終わりという安易な道を選ばないでください/

なぜ目標や目的を自覚することが大切だと考えたのか、次に、なぜ必ずしも明確な目標や目的をもっている必要がないと考えたのか、この二つのなぜという問いのどちらにも答えることのできる答えを見つけてください/前提を疑い、二者択一を疑った上で、自ら問いを設定し、自ら答えを提案できる人になってください/

(普通の生徒はこれでいい/しかし、教訓のようなものをうさんくさいと感じる素晴らしい感性をもった人のためにウサギの続き)

「カメに負けたウサギ」というレッテルを貼られたウサギは、みんなからバカにされました/ウサギは「失敗から学んで見返してやる」と決心します/しかし、そうは簡単には目標と目的をもてるようにはなりません/もう一度カメとかけっこをして勝っても、レッテルは消えません/

ウサギは悩み苦しみました/ウサギはウサギのままでした/試験勉強は一夜漬け/仕事についても、明日やれる仕事は明日に回して、今日は遊んでしまいます/

そんなウサギでしたが、明日に回すと間に合わない仕事は、徹夜してでも終わらせました/集中力と瞬発力だけが、ウサギの取り柄でした/

ウサギは年をとっていききました/徹夜ができなくなり、明日に回してもやれた仕事は、今日から始めないと終わらなくなりました/

ウサギは少しだけ生き方を変えることにしました/明日があると考えのをやめて、今日しかないと考えることにしました/明日やれることは何かと考えるのをやめて、すべてを今日やることにしたのです/今を楽しむという生き方は変えられないので、今日を精一杯生きることになりました/

ウサギは悩まなくなりました/今までは明日に回していた仕事のことが気になって、今日を十分楽しめませんでした、今は心おきなく今日を楽しめます/

ウサギは今、会社でそれなりの役職についています/若手社員にはウサギもカメもいます/どちらのよさもわかる上司となって、活躍しているようです/

さて、ウサギは失敗から学んだといえるでしょうか/

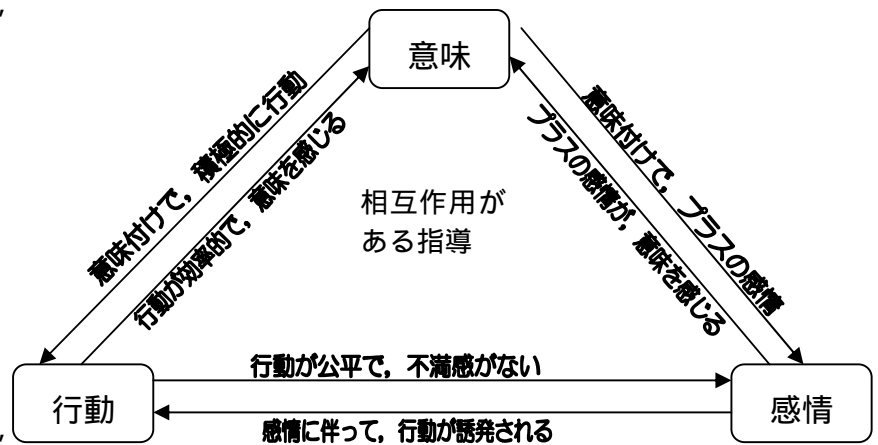
発達段階に応じて働き方を変える

発達段階を考えると、小学生はまだ、自分で意味をつくることができません。だから、教師が意味を語りながら、自分で意味を考えることができるようになるように、働きかけます。

中学生になると、反抗期に入ることもあり、意味はわかっているけれど、素直に行動がとれないことがあります。その場合は、感情に働きかけて行動を促します。

このような教師の判断と働きかけ方は、実際に子ども達と関わることで、わかってきます。

だから、教師は、インプットは少しで、アウトプットする場面をたくさんもつことで、教師として成長できます。風土会で学んでいることは、実際にアウトプットすれば、生きてくるのです。



何かしたら、「振り返り」までセットにしないともったいない

行事でも授業でも、教育活動すべてについて言えることですが、振り返りをするすることで、その後の子ども達の行動が変わります。振り返りまでをセットと考えて実践しないと、もったいないのです。教師も子ども達からフィードバックをもらわないと、気付くことができません。

では、どのように振り返りをすればよいのでしょうか。

子ども同士で振り返りをさせると、感情交流が生まれます。子ども任せでよいのです。その時に、教師が拾おうとしているのは、ルールづくりにつながる発言です。例えば、「あの時、みんなが自分の方を見て、頷きながら聴いてくれたから話しやすかった」など、子どもの中から出てきた素直な言葉から、ルールづくりをして、行動につなげていきます。「その行動は、とてもよいこと」と意味付けして、それを浸透させます。そのような発言が子どもから出たときには、「よし、きた！」と思って、ルールづくりをしましょう。

学級の雰囲気が親和的なクラスは、このように、教師がルールづくりを意識しているのです。

誰か1人のハートをつかむ

振り返りをすると、「○○さんの○○な行動がよかった」など、必ず行動面のよさが出てきます。それに対して、教師が意味付けをして、「すごいね」と喜ぶ姿（感情）を見せると、子どもは自己有用感をもつことができます。そこは、教師がエンターテインメント性を発揮するところです。子どもは、教師の反応に敏感です。教師が認めてくれている、喜んでくれている姿を通して、自分が役に立ってうれしいという感情（自己有用感）をもちます。それは、役に立っている自分が好きという感情（自尊感情）に高まります。つまり、自己有用感を高めると、自尊感情が高まるのです。

振り返りでは、誰か1人の発言をとりあげるだけでも意味があります。誰か1人のハートをつかむだけでも、それがクラスに浸透するきっかけになります。クラスであまり目立たないけれど、裏表なく誠実に行動している子どものよさを伝えるチャンスにもなります。

やってみると、意味がはっきりしてくる

どんな活動をするにしても、振り返りをセットにして、とにかくやってみます。よくなければ、やめればよいのです。子どもから案が出たら、躊躇せずにやらせてみて、3日くらいやってみて振り返らせて、よくなければ違うアイデアでやらせてみます。そうすると、やる意味、やらない意味がはっきりしてきます。

一点突破でも、意味があります。何か一つでもこだわりをもって考えさせていくと、子ども達が変わっていきます。これは、公平なのか、どんな意味や価値があるのか、どんな気持ちがしたかなど、自分達で考えるようになります。教師が気をつけるのは、何にこだわらせるかという視点をさりげなく示すことと、それを示したら中途半端にしないことです。

例えば、重枝先生の実践に、「ありえないゴミ箱」があります。普通ならゴミ箱に捨てないようなもの（リサイクル可能なものなど）が入っているのを絶対に許さないために、ゴミ箱の中身を全部教室にぶちまけて、子ども達に考えさせたことがあるそうです。

私（柴田）は、班活動にこだわりがあるので、日頃の係活動や点検活動を席替えとリンクさせています。そうすると、係活動や点検活動が活性化し、班員が声をかけあって、一緒にルールを守ります。教師は、それに価値付けをすればよいだけです。教師が指導しなくても、班員同士で声をかけあうような横の関係が生まれます。

ルールを守らないクラス

Q-U アンケートの結果「なれあい型クラス」という診断が出た場合、マニュアルでは、ルールを強化しなさいと書いてあります。教師のリーダーシップ・スタイルと学級集団の型には、相関関係があります。担任は矢面に立って実践しています。その結果、そうなっているのです。

だからこそ、チーム実践を通して改善していきましょう。Q-U アンケートをする意味は、チーム実践につなげた時に生まれます。

担任は、マニュアルに翻弄される必要はありません。もちろん、自分の実践を振り返るひとつの材料にはなりますが、一般的な対応とは逆の場合もあります。

学校全体として、守らせるルールがあれば、全体で指導できます。

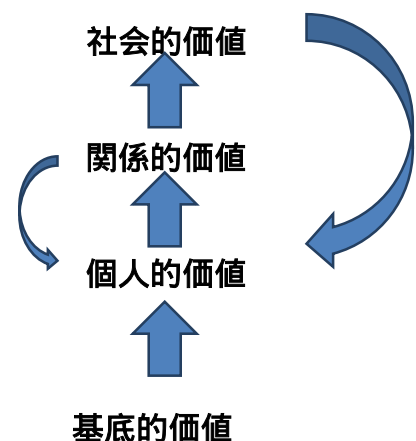
担任として、まず必要なのは、信頼を高める実践です。信頼関係をつくってインナールールをつくるのです。子どもにおべっかを使うわけではありません。担任は、短い時間でも、すべての子どもと1対1で話をする時間をもつようにします。「あの先生が言うからしたくない」ではなく、「あの先生が言うからしよう」という信頼関係をつくっていけば、ルールを守るクラスに変わっていきます。

自己有用感 = 自己価値観

個人的価値で生きていくと、必ず壁にぶち当たります。ポキッと心が折れる瞬間があります。チームメイトがいるから、まわりがいるから、また、頑張ろうと思えるのです。それが、関係的価値であり、まわりとの人間関係が必要です。

やらされ感をもって「朝のあいさつ運動」をしている子ども達が、地域の人達から「あいさつ運動をしてくれて気持ちがいい」とほめられると、社会的価値を感じて、自分たちの価値が高まります。自分が役に立っているから、自分が好きという「自己有用感」「自尊感情」をもつことができます。

ルールを守らせるには、自己有用感をもたせるようにするのです。



自己有用感を高める「振り返り」とは

振り返りを通して自己有用感を高めるためには、子どもが「こだわった」「見てほしかった」ところと、教師がほめるポイントをマッチングさせる必要があります。それがずれていると、子どもはしらけてしまいます。教師は、自分の基準や水準でほめていることが多いので、ずれが生じるのです。子どもは、自分が努力していないことをほめられても、うれしくないのです。子どもがどんな努力をして何を認めてほしいと思っているのかをキャッチする感性が重要になります。それを考えて、振り返りの視点を決めるのです。

具体的な事実があれば、一瞬でも役割を果たしていたらよしとして、それを認めて伝えるようにします。子ども同士の振り返りでも、具体的な場面を見つけるように促します。振り返りで「いいところを探して書きなさい」では弱いので、教師が視点を示すのです。

そして、クラスの行動ルールにしていけます。こんな意味があったねと説得できます。好ましい感情と結びつけて、意欲を高めます。このように、行動と意味と感情を統合した指導をしていきます。

子どもの心に残る伝え方

教師は、子どもに語りかける場面が日常的にあります。人は、感動した話は忘れません。子どもの心に響く話がどれくらいできるか、教師はいつも、考えておく必要があります。

様々な子どもがいます。素直に人の話を受け入れる子どももいれば、反抗的で人の話を受け入れない子どももいます。それを踏まえて、子どもにどんな内容の話をどんな風に伝えるか、そこに、教師の人間性が出ます。人間味あふれる教師は、子どもにとって忘れられない教師になります。

また、世の中が急速に変化している今、幅広い考えがあります。自分の考えをつくること、自分の考えと逆の考えに対しても、意見をもって自分の考えを伝えていくことなどが、今からの子ども達に求められていきます。

道徳のモラルジレンマ授業は、相手の意見を尊重しながら自分の意見を述べる授業です。このような授業を取り入れたり、風土会で紹介しているエクササイズを取り入れたり、様々な工夫が求められます。

「ウサギとカメ」の話も、伝え方によって、子どもの心に響く話になります。そのような話を自分の持ちネタとしてもっておくことも、大切なことです。自分なりにアレンジして、自分らしい伝え方で子どもに話してみてください。

普段から、思考を筋道立てて整理する習慣をもつことをお勧めします。

演習「まちがいさがし」

「まちがいさがし」は、自然にチームワークが生まれる、楽しい演習です。教室は、よい雰囲気になります。このような楽しい時は、しつけをするチャンスと考えます。難しい演習の時は、リレーションを増やすようにします。

「まちがいさがし」の授業で大切なのは、「自分の考えをもつと話し合いが活性化する」という点です。

AとBの絵には、違いが10個あります。

6人1組のチームをつくり、3人がAの絵を順番に見に行きます。どんな絵なのかを、他の人に説明したり、実際に書いたりして伝えます。

次に、Bの絵を残りの3人が順番に見に行き、違いを見つけます。

最初、Bチームの3人は、どんな絵なのか、まったくわからない状態です。自分の考えがない状態と言えます。まだ、自分達の出番ではないので、関係ないと思っています。

Aチームは、自分の考えをもっている状態です。

自分の考えをもっている人ともっていない人がいると、話し合いは活性化しません。だから、教科の授業の時には、自分の考えをつくる時間をしっかりとる必要があるのだと先生達も実感できます。

しかし、自分の考えをもっていないBチームの人、Aチームの人の話をよく聞いていたり、質問をしたりしていた人は、すぐに、まちがえを見つけてくることができます。

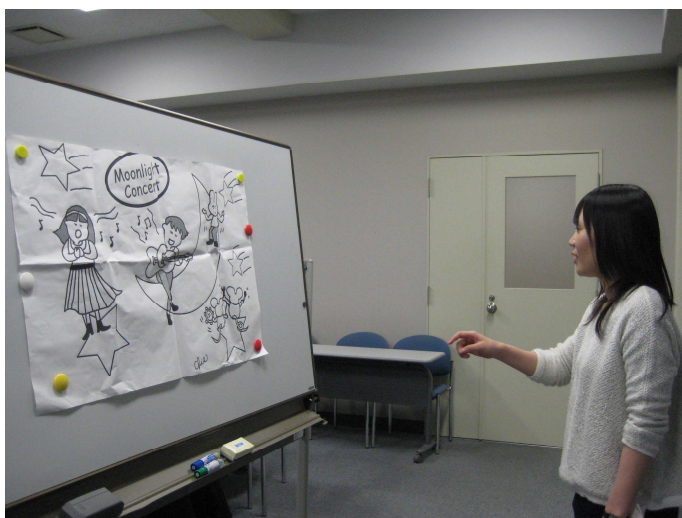
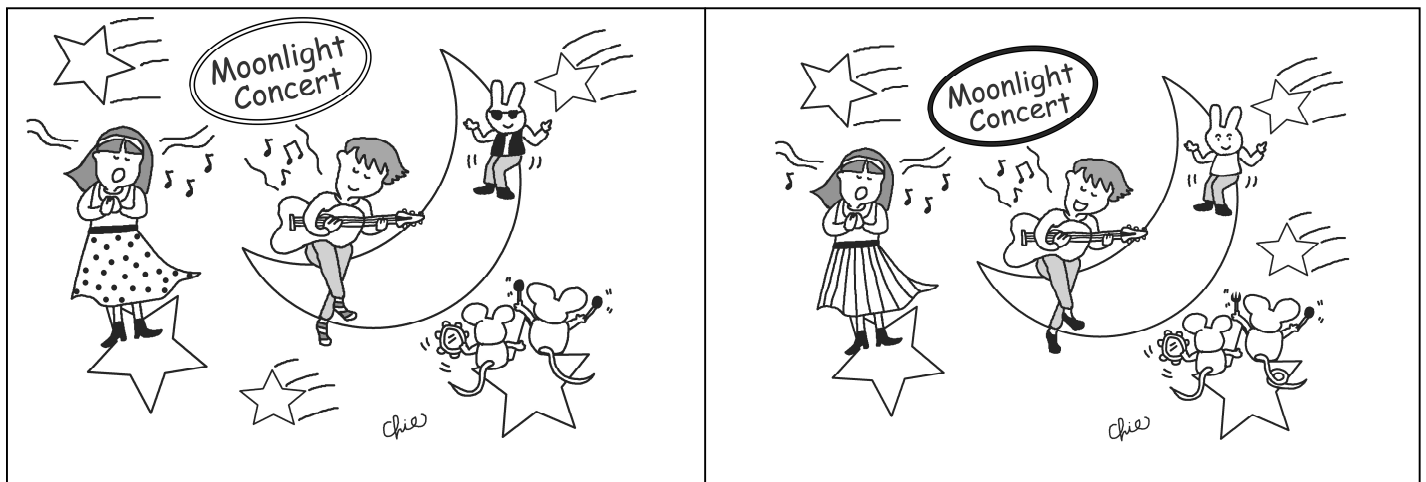
チームワークの心地よさや協力する楽しさは、必ず実感できる演習です。それに加えて、教科の授業に関連させた気付きを得ることができると、教師が知っておくと、効果的な授業が展開できます。

「まちがいさがし」と「教科の授業」を、どのように関連付けて子どもに語り、行動ルールをつくっていくかが、教師の腕の見せ所です。ぜひ、実践して(アウトプット)、先生方の実践を報告してください。

GWT（まちがいさがし）	教科の授業
最初に見た人	めあて、目標、ビジョン
A だけの時	普通の話し合いの状態 B → 質問（参加）
B の時	みんなが自分の考えをもって話し合っている状態 「質問していたから、すぐ気付くね」 との差を実感させる
個数を言ったとき	ヒント
5つにしぼる （コミュニケーション）	深める 確認テストのようなもの

「まちがいさがし」と「教科の授業」の関連について、上のような整理をしておいて、子どもの活動の様子を見ながら、タイミングよく教師が話をします。

あれもこれも話そうとせず、場合によっては、ひとつだけ押さえるようにしてもかまいません。
1回の実践で何かを成そうとせず、教師は余裕をもって、タイミングを待っておきます。



今回のキーワード

- 関係性→思考→行動→結果のサイクルを意味付ける
- 基底的価値→個人的価値→関係的価値→社会的価値 価値はつながりの中から生まれる
- 自尊感情：自己に対して肯定的な評価を抱いている状態
- 自己有用感：他者との関係を自他共に肯定的に受け入れることで生まれる，自己に対する肯定的な評価。他者の存在なしには生まれない。

♪ 学習会に参加された先生方の感想 ♪ （参加人数 26名）

- ・「学級のルールづくり」というと、子どもと共に考えていくことが大切だし、重要だと分かっているけど、何かトラブル等があると、「今日からはこのルール」と教師側が決めてしまうことも少なくないと思いました。だから、子どもから発せられた言葉や意見を大事に、それを試してみて、失敗しても成功しても、それを振り返り、子どもと共に考えて、また考えて・・・と続けていくことが大切だと感じました。
 - ・学校で「Teacher's Teacher」を参考にしているのですが、その「ねらい」や「振り返り」の仕方など、見落とししていることがたくさんあり、とてももったいないことをしていることに気がきました。子ども達が考える時間である「振り返り」をきちんと行うことの大切さに気付けたので、次の学活では、子どもにしっかり考えさせたいと思います。頑張ります。
 - ・「感情」と「意味」と「行動」は、振り返り活動をしていくことで高まることを実感しました。振り返りをしないと「もったいない」という言葉が残りました。常に、日常生活や授業を関連付けて行動ルールをつくらうと思いました。自己有用感をキーワードにして、子ども達に伝えていきたいです。
- （先生方の感想を読むと、「振り返りをしないともったいない」という言葉が、強く印象に残ったことがわかります。伝える側の熱意を受け取っていただいているのだと、自己有用感が高まります。風土会の後、事務局でも必ず、「振り返り」をします。一番の学びは、先生方に書いていただく「コミュニケーション・カード」です。先生方からいただく「感想」を読んで、次への意欲をいただいています。だからこそ、振り返りをしないともったいない！！）
- ・風土会で教わった集団づくりを柱に、授業をしています。とてもよい雰囲気です。授業だけで終わらずに、日常生活にもつなげる声かけをしています。
 - ・「まちがいさがし」をやってみて、生徒の立場になっていろいろなことを感じる事ができました。私はBのグループでしたがAの人達が見に行っている時、何もしないで見ていただけだった自分に気がきました。グループの中に、上手に質問される方がいて、とてもよいお手本でした。何をどう聞けばいいのか（どう関わればいいのか）はじめは分かりませんでしたが、とても勉強になりました。授業中、私語の多いクラスがあります。怒ったり待ったりしていますが、信頼関係を築いていくことが大切という違う視点に気付かせていただきました。
 - ・「まちがいさがし」の演習では、はじめは話がはずまなかったのに、重枝先生がお話をした後は、質問も多くなり雰囲気もぐんぐんよくなりました。このように、実際に演習をする時には、私も子どもの様子を見て、的確なアドバイスをしたいと思います。また、普段あまり話さない子どもも、行動（質問すること）の意味やその価値を伝えることで、話そうという気持ちが自然にわいてくるのではないかと思います。毎回、信頼関係を築いた上での「ルール」ということが心にしみます。
 - ・「アウトプットする場面をたくさんつくる、それを繰り返して継続することで、子どもの行動の質を高める」という重枝先生の言葉がとても心に響きました。日頃、本を読んだり、こうしてお話をきいたり・・・自分は、インプットに比べてアウトプットがまだまだ不十分だと感じました。また、「関連付ける」ことは、日々意識していますが、今日のGWTを通して、子ども達への指導のあり方がより具体的にイメージできました。